

---

**それでも俺は、お前のことが、**

巻埜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでも俺は、お前のことが、

### 【Nコード】

N9556U

### 【作者名】

倦埜

### 【あらすじ】

主人公の高梨 誠は幼馴染の野々村 望と一緒に学校に通っていた。

でも誠は幼いころの記憶は薄く、あまり望と遊んだ記憶がない。というより、幼いころ遊んでいた女の子のことしか覚えていない。でもその女の子の行方は分からない。でもその女の子の正体は…三話完結です。

一話 親友の秘密（前書き）

三話完結です。

## 一話 親友の秘密

10月28日、俺の高校生活が始まって、6カ月と14日が過ぎたころ。

俺は東北南原西高校（東北南原西高校）という、どの方角にあるか分からない高校に幼稚園の時から（おさななしみ）の幼馴染、野々村望（ののむらのぞむ）と一緒に登校していた。

望は女みたいな容姿の男で小さくて、女子にかわいいと評判だ。望はそのことに関しては何んげらでも無いみたいだが…。

俺にもちよくちよく女子から、『野々村君って昔もかわいかったの？』と聞かれるが、

俺は幼少時代、望と遊んだことはあんまり覚えていないので答えることは出来ない。

確か、俺、ちっちゃいころ、女の子と仲良かったような…。

その女の子は、ショートヘアでかわいくて、俺は昔、その子に恋をしていた。

でも今は、その子の行方が分からない。どこ行っちゃったんだあの子？

「どうしたんだ？誠。」望の声で我に返った。ちなみに『誠』と言うのは俺の名前だ。

「何かやらしい妄想でもしてたのかい？」

「してねえよ！ただ昔のことを思い出していただけだ！」

「昔のことか…。」望が何か、ぼーっとしている。

「どうした？」「いや、何でもない、何でもないよ。」「望があわてた様子で首を振る。

「？」「まあいいか、とりあえず学校に向かおう。

「キーン、コーン、カーン、コーン（チャイムの音）」

朝礼が終わり、教室がざわつき始める。

「高梨君！」たかなし クラス一番の美人が俺に駆け寄ってくる。

ちなみに『高梨』って言うのは俺の名字だ。

「おう、佐々木。」ささき

彼女は佐々木優香。ゆうか

クラスの…いや、学年の…じゃなくて、この高校のアイドルと呼ばれる存在。

綺麗な黒髪に整いすぎている美貌、うつくアイドルと呼ばれていることに納得できる。

そんな佐々木が俺に何の用だ？

「野々村君と、…その付き合いたいんだけど…言っついてくれないかな？」

俺のことじゃなくて、望のことか…。

「それなら本人に直接言っただろうが気持ち伝わるもんじゃないかな？」

「そんなの…恥ずかしくて出来っこないよ。」

ああ、そうですか。

「まあ、一応言っついてやるよ。」高梨君！

そういつて、佐々木は軽い足取りで女の子グループの塊のところに戻っついていった。かたまり

「望。ちょっとこっち来てくれないか？」

望はやり忘れていた宿題をやっているのを後回しにして、こっちに駆け寄ってきた。

「佐々木がお前のこと好きらしくて、お前と付き合いたいっつてさ。」

「佐々木が？…ごめん誠、断っついておいてくれないか？」

「佐々木をふるって、お前、正気か!？」

「まあ…。」まさかお前、好きな奴いるのか？

「…うん…。」意外だな！誰だよ！教えてくれよ！

「絶対言わない！」と望が顔を真っ赤にして言う。

「まあ、そこまで言うなら深くは聞かないけどさ。」

「もういいだろ。じゃあ僕は宿題の続きやるから、佐々木にはごめ

んって言っというて。」

と言って、望は席に向かう。座る直前に、  
「本人の前で言えるわけじゃないじゃないか。」  
「ん？望なんか言ったか？」

「何にも言ってないよ。」

なんて言っただんだ？あいつ。まあいいか、これ以上深く聞いたら怒られそうだしな。

とりあえず佐々木に伝えとかなないと…ってあれ？女子がいない。

そういえば、一時間目って体育だな。佐々木に伝えるのは後にして、さっさと着替えないとな。

…あれ？望がいないぞ。トイレか？

着替え終わったし、運動場に急がないとな…そういえば着替えてる間、望のやつ、いなかったな。

ちょっと探してから行くか。

教室にはいなかったし運動場にもいなかったから、やっぱりトイレか？俺がトイレのドアを開けると望が着替えていた。

「誠！？」  
「こんなところにいたのk…え？」

望は上半身裸だった。

そして胸にコルセットをつけていた…。

「望…？お前…。」  
「…。」

「女…なのか？」  
望は小さくうなずいた。

## 二話 親友のピンチ

「お前…何で男装なんかしてるんだ…。」

「…。」望は何も答えない。俺も言葉が出てこない。

俺より小さな体、狭い肩幅、そして男とは思えない容姿。

確かに今考えてみればとてもではないが男に見えない。

「誠…。昔、一緒に遊んでた女の子は、実は僕なんだ…。」

「え…。」

確かに誠が女だったら俺が昔、女の子と仲が良かったことに辻褄つじつまが合う。

でも、それだと俺がずっと望に片思いしてたってわけかよ…。

「誠は…誠はこんな男装趣味の僕のこと嫌いになったよね。」

他ししかに男装趣味の奴は俺は好ましくは思わない。でも…

「望は望だろ。今までも、これからもずっと俺の知ってる望だ。

だから今まで通りの関係でいいんじゃないか？」

「ま…こと…？僕のこと嫌いにならないのか？」

「さっき言っただろ？お前は俺の親友、

ずっとそうだったんだから今から関係を壊す必要は無いだろ？」

「誠…。ありが…とう…。」「運動場に先に行っておくぞ。さっさと着替えて降りてこいよ。」

「うん…。わかった。」

俺はそういつて運動場に向かった。途中で同クラスの田中とすれ違った。

「どうしたんだ？授業始まるぞ。」「ちょっとトイレに行くてくる。」

「おお…。」「ちょっと待て、トイレ？」

「田中！ちょっと待て入っちゃだめだ！」

だが俺の声は少し遅かった。

「野々村…?」「田中…。」「どういうことだ…?野々村が女…?」  
「…。」「…。」「俺はどうすることもできなかった。」

「高梨。野々村って女だったみたいだぞ。」

田中は俺が望が女ということを知らないと思っっているようだ。

「そ…そうなのか…。」「俺は適当に返事するしかなかった。」

「何だよ。もつと驚けよ。まさか…お前、こいつが女だってこと知ってたんじゃ…。」

「違う!」そう言ったのは望だった。

「僕はこの姿を誰かに見られたのは君が初めてだ!」

「じゃあ何で高梨は微妙な反応をしたんだ?高梨!」

「さあね。僕が女だつてことに引いたんじゃないのかな?」

「野々村、お前には聞いてない。…知ってたのか?高梨。」

「俺は…」

…知らなかった。望の言う通り、男装してたということに…引いたんだ…。」

俺は最低だ…。望を守る術すべもいくつかはあっただろうけど、

俺は自分のことを守った。俺は…一番最低だ…。

今日の間はこの噂はすぐに広まった。みんなは望を避けるようにしている。

そして俺も望に近寄れない。近寄ったところでどんな言葉をかけていいのかわからない。

「あいつが噂の男装女らしいぜ。」「ウワァ…気持ち悪い…。」

望は机にもたれているが体が震えている。泣いているんだと思う。

だが俺は声をかけられない。俺はきれいごとばかり言っている最低男だ…。

時間がたつにつれてクラスの雰囲気は悪くなっていく。

六時間目になるとみんな望から席を離している。



望自身もそれを分かつてる様子だがうつむいて何も言わない。

そして六時間が終わり放課後の教室…俺は望に声をかけようとした。

…だが田中を中心とした男子四人に止められた。

「やめとけよ…。こんな奴と仲良くしてるとお前まで変な目で見られるぞ。」

その時、俺の中の何かがはじけた。

**最終回** それでも俺はお前のことが（前書き）

最終回です。

## 最終回 それでも俺はお前のことが

「……るな……」「どうした高梨？」

「ふざけるな！」

「どうしたんだ？お前おかしいぞ。」

おかしいことは分かっている。でも俺は望と今まで通りの関係で接すると決めた。

だから、俺だけ嫌われずに、望だけ嫌われるのはおかしい。

だから望、俺も一緒に嫌われてやるよ。

それで俺たち二人だけで今までの関係を続けようじゃないか。

「誠……何言ってるんだ……？」

望は驚いている。当たり前前の反応だろう。

「どうした高梨？」

「お前らは望を闇に追い込むことしかできないのか？」

望に救いの手を差し伸べることは出来ないのか？

お前らがそんな奴らだったのなら、

今までお前らにつき合っていた俺がバカだったと思えねえよ！」

「意味分かんねえぞ、高梨。」

田中がそう言うところ……

「ほつとけ、田中。こいつは男装趣味の女が好きなただの変態だ。」

田中の他にいた三人のうち一人が田中に声をかける。

「あ……ああ……。」

田中はそれに相槌を打って教室から出ていった。

俺たち二人しかない静かな教室、その沈黙を破ったのは望だった。

「どうしてだよ、誠。何で嫌われるような真似をしたんだよ!」  
「望は俺と約束しただろ?」今まで通りの関係を壊さない』と…。

でも、俺は一度この関係を壊してしまった。  
だから『もう二度と関係を壊さない』って俺の中で誓いを立てたんだ。

だから、この関係を壊すようなことがあれば俺は何でもする。」

「誠。今からでも遅くない。

田中たちに『さっき言ったことはジョークだ。』って言うてくるんだ。」

「今の俺の話聞いてたか?」 「誠!行つてきてよ!」

「嫌だ!俺は誓いを立てたんだ!お前は何で俺のことにそこまで必死なんだよ!」

「そんなの、誠のことが好きだからに決まってるじゃないか!」

望が顔を真っ赤にして言った。

「望…?」「そうだよ、僕は高梨誠が好きだ!幼いころから大好きだ!」

「望…。」「だから、行つてきてくれ!僕の話は嫌いになつてくれ!」

「…望…俺からも一言<sup>ひと言</sup>言わせてもらうぞ!」「そんなの聞きたくない!」

「それでも俺はお前のことが好きだ!」

「誠…、誠…ヒック…誠…ウワアアアアン!」

望は俺の胸に飛び込んできて泣き出した。

「だから、このままの関係を壊すぞ。」「え…?」

「これからは親友じゃなくて、俺の彼女として、俺の隣にいてくれ。」  
「誠…ありがとう…。ヒック…。」  
「帰ろうぜ。望。」  
「うんっ！」

…次の日…

俺と望は教室の前にいた。

「入るぞ、望。」  
「本当に入るのか？この格好で…。」  
「大丈夫だ。俺も一緒にいる。」  
「…わかったよ。行こう。」  
俺と望は教室のドアを開けた。みんなが教室で口々に俺と望の噂うわさをしている。

しかし、みんなは驚いている。

それもそうだろう、今の望の格好はいつもの男子の制服じゃなくて、女子のセーラー服を着ている。正直言っただけか。

「（あいつらが噂の変態共だろ？）」  
「（ああそうらしいな。でも、かわいくねえか？）」  
そんな中、田中なかが立ちあがった。

「どうした？田中？」  
田中は俺らのほうを向いて、こう言った。

「おはよう。」  
「おはよう。」  
それに応じて、俺たちも同じ言葉を返した。

「田中、やめとけよ。」  
「何でだ？こうしてみれば、ただのかわいい女の子じゃないか。」  
「確かにかわいいけど…。」  
「ほら、もう男装はしないだろ。」  
「何でそんなことが言えるんだ？」  
「だって、あいつら二人が…いや、言わないでおこうか。」  
何で俺達が付き合ってることに気づいてるんだ？

こうして、俺たちの日常は続いていく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9556u/>

---

それでも俺は、お前のことが、

2011年7月25日14時11分発行